

150
674

脚 演
本 劇

辨
慶
安
宅
の
關

088748-000-2

特67-788

辨慶安宅の關

守住 桂/著

M26

DBJ-0407



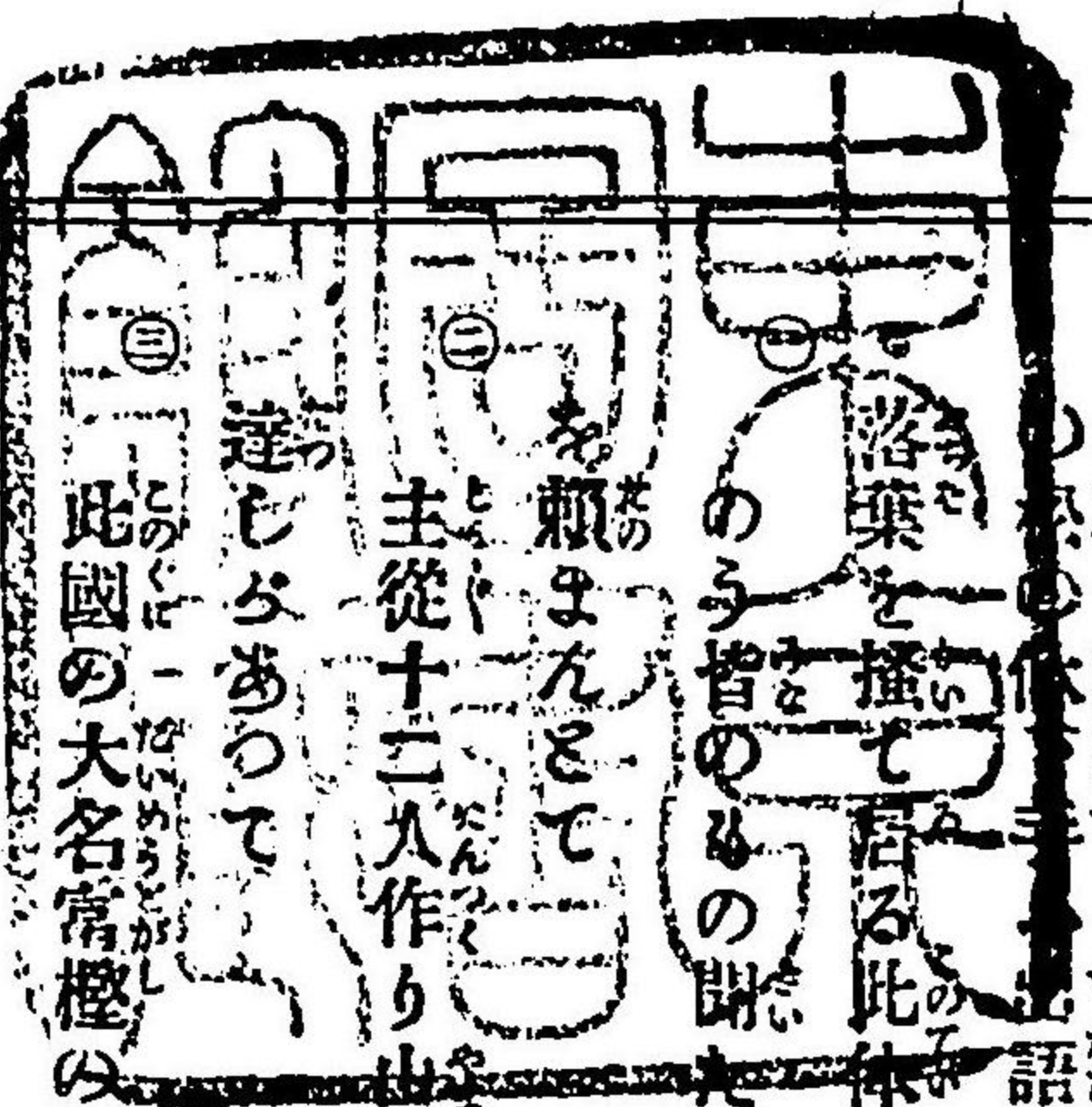
演劇 辨慶安宅關

全一幕

加賀國安宅根上り松の場
同 新 關 の 場

- 一 登場の人名
- 一 九郎判官兼左衛門
- 一 武藏坊辨慶
- 一 十郎兼之助兼房
- 一 伊勢三郎兼盛
- 一 關三郎兼直

- 一 片岡八郎常春
- 一 熊井太郎忠元
- 一 源八兵衛廣綱
- 一 龜井六郎重清
- 一 備前平四郎成春
- 一 鷲尾三郎兼久
- 一 富樫左衛門兼直
- 一 一番卒 數人
- 一 一里の童 五人



本舞臺一面の平舞臺二重舞臺を置き正面杖振より根上りの松向ふ海を見
見の書割ズツト上手岩の張ものよて見切り舞臺能き所は拾石都て加賀國安宅根上り

落葉を掃て居る此体よろしく波の音唄よて幕明く
のう皆のもの聞たり今度判官兼と鎌倉兼のお中違ひとなり判官兼にハ奥州の秀衛

主従十二人作り山伏と成て奥州へ下られるとやら見附次第搦めとれと鎌倉兼のお
達じとあつて

此國の大名常樫の左衛門家直兼の此外れは新關を拵らへて三百人の關守よて守ら
る、

④ 一昨日切られた山伏の顔悪体に見えたるが昨日切られし山伏達ハ何所となく愛嬌
のある面体

⑤ アナ音高し由なき山伏の噂として關守兼へもれ聞え尤められてハ恐ろし、日のあ



る内にモウ一掻のとうちやアないり

皆、オ、夫の宜らう

皆、打連て松葉を掻ながら上手へ這入る知らせよつき山臺を打返し長唄連中の出語りよなる

諸掛「旅の衣のすやかけの旅の衣の襦袢の露けき袖や絞るらん 唄「頃、如月末の方判官都をみちこちの道なき固の刑戮を道れ兼つ、忍ふ山奥秀衡を木蔭ぞとぞなあれむ山櫻花より外は知れじと身身をうふる蘇民客歌

此文句の内判官太刀附水衣頭巾笈を背負向ふより出て来り花道よき所よ止る

唄「伊勢の人との伊勢の三郎義盛駿河の二郎清重片岡八郎常春皆山伏の姿よて越路の旅よ迷へどや

此内向ふより伊勢の三郎、駿河の二郎、片岡八郎三人何れも頭巾襦袢太刀附よて出て来り花道よ居並ぶ

唄「扱乳八子の兼房が髪髭寒く白雪に横雲くらき曉月の熊井太郎忠元源八兵

術廣綱空よ満たる春の霜

此内向ふより十郎權の頭兼房老たる拵へ熊井太郎、源八兵衛何れも山伏の姿よて出て来り花道よ居並ぶ

唄「残んの星の四ッ五ッ六ッをうくする君の爲龜井の六郎重清、備前の平四郎成春

此内龜井六郎備前の平四郎何れも山伏の姿よて出て来り花道よ居並ぶ

唄「都を餘所よ捨る身の心ぞささよ山深き鶯の尾の三郎義久常陸坊海尊武藏坊辨慶の先達の姿よ成て主従以上十二人

此内向ふより鶯の尾三郎、常陸坊海尊、武藏坊辨慶黒の襦袢厚板太刀附腰巾革足袋染緒の草鞋袈裟頭巾法螺の貝を脊に負ひ珠數を持つて出て来たり花道よ居並ぶ

唄「一歳平家追討の糸緋威しもいつしうに九會蔓陀羅の麻衣頭巾襦袢法螺の貝外に悪魔降伏の形を見せて心に忍ぶ浮世の道狭き旅立ちこそ哀なれ

ト此唄の内は山伏皆々舞臺よ来る

唄 「關の此方の音羽山越てあなたの嵐に咽ふ松の調も開捨て雁に連立つ湖上
の雲昨日の雪を其儘ふ花の吹雪の志賀の山鳥の聲に木の色人よ心をつけの
はふ流轉生死の海ふのく浮つ沈みつ漕れゆく海津の濱邊眞野の萱原餘語の海
梁が瀬うきせつらき瀬の四十八ヶ瀬七里午いくへの霞いくせの波越ても末の
泊りとの何所荒乳の山高く歩み艱みしは風情

ト皆々宜しくあつて判官行惱みたる仕打にて捨石小腰を掛け左右山伏住ふ

唄 「傍痛はしやと人々の何れも目と目を見合せて

ト宜しく仕打あつて

伊勢 何なれば六十餘州の武士どもおち怖れたるは大将山田の案山子柴人よも心置うる
る傍有様

駿河 遠遠東南の雲を起し西北の雪霜よせめられ埋もるは傍身の果

片岡 正八幡大菩薩のいりよ非禮を受玉ふ神も偽りある世なるの

唄 「鶯の尾増尾常陸坊藤掛の袖を顔よみて悲嘆の涙せらあへず
ト皆々愁嘆の仕打ある

辨慶 ハテよしなの落涙や神に偽りあるらら我等凡夫も空事せよ天も恐れず世も恐れ
ず鎌倉もなまくらさのあら氣樂や面白や○

ト辨慶腰なる扇子を取て
嬉しや瀧の水

唄 「鳴る瀧の水日日照とも絶すとうたり 唄へや唄へ方々見よ波の
敦賀の磯よ打つとよのいや現とも夢ともわりぬ理りを知らせて峰の稻妻を餘
所目よさこそ山伏のうつ石の火燈の城どのや身の愚さよいつ迄り世も繋がる
る牛が瀬のさづなを早く切れとてぞ智慧の劍の砥並山末の三國の浦傳は濱の
眞砂を百千歳敷よ取しい昔よて命の内今日の日もはや入相の金が崎ちらさ
ぬ花も花のうほさそふ嵐の自ら花の安宅の關越ていつらい霧ん峰の雲あら
面白の旅枕と泣ぬ顔する辨慶も心の千よ碎くらん

ト辨慶よろしく振あつて納まる

唄 「折柄茲へ葦刈童

ト上手より以前の里の童五人出来る

唄 「辨慶是幸ひと打額さ笈の中より扇あまた取出し

ト是よて辨慶唄の通り笈の中より扇子を五本取出して

辨慶 是と汝等の此邊の里の子う夫々の仕業とて風を俟て木の葉を掻き露を分て草を刈

る痛いけな子供は能き物を取らせん是の城家の扇とて都の名物一本づゝ取らせん

ト辨慶右の扇を五人の童よ遣る

○ 其ンなら是を私らよ下さるのの

辨慶 オ、其方達ふ取らせる代りよの聞きたい事がある

○ 扇を貰ふた返禮ふ何なりと聞うつしやれ

皆へ 教へて遣らう

辨慶 過分くさて此松の由ありげよ見受るゝ何と云ふ名木ぞ

○ オ、是こそその北國は隠れもない安宅の松

辨慶 シテ是より奥州平泉へゆく近道をし知たるう

唄 「をしへてくれよとすうされて扇も馴染む風の子や童ども打解て

○ 是より奥の街道上道中道下道とて三筋あり

○ 上道の北國大名の鎌倉の下り上り

唄 「此所よての笠をぬげ彼所よての下馬せよと泊りも自由ならすさや

ト童 ○ 宜しく振あつて

○ 又下道の越後路の船の上寺泊り九十九里

唄 「のツたりうんむら八十里石動の織綱彦の峰白山下し吹時の佐渡の島へ吹

附け出雲崎へ吹戻し

ト ○ 振あつて

○ 一年も二年も漂よふと承とる

○ 又中道の此道筋

唄 「いちより浄土歌の秋親知らず子知らず比岳尼轉しとうし投

⑤ 音ふ聞ゆる難所なれども道のり近しとハ奥通ひする人の物語り去ながら茲又一ツの大事あり判官さの十二人の作り山伏とあり奥へ下り玉ふとて

④ 此國の地頭宮樞の左衛門家直さの此所を承てり

③ あの松林の外れハ乱杭逆茂木引廻し關の戸堅く山伏をどめ

② 繪圖ハ合ふたる山伏ハ首を切て獄門ハ掛らるハ

① 色白ハ猿眼向ふ齒少し出たるハ

唄 「判官迄とて一段高く掛らるハ

① 色黒く頬骨われ

唄 「眼の光るハ武藏坊辨慶日本一の荒者と猶も厳しくのけらるハ一昨日三人

② 昨日ハ五人其前とて毎日ハ五人七人山伏の切られぬ日とてハひとす

③ 旅の衆ハいのたるなど近郷お觸強けれども扇の恩に物詰る殊ハ一ト連十二人

④ 關所へ掛り玉とて一人も命ハよもあるまじ

唄 「はやハ跡へ歸り玉ハや山伏達

⑤ もの云ふ振庄屋迄ハ聞えてハ

唄 「わら恐ろしやいさハと草籠うたげ木の葉の杞さらハハハと歸りけり

④ ト是にて里の童五人草籠と杞をかたげ皆ハ下手ハ這入る

唄 「牧童の物語聞くより人ハアツと計り一期の浮沈此時と呆れ果てぞ在しけ

③ るやハあつて判官

ト皆ハ宜しく仕打あつて

② 判官 さてハ道すむら聞きしハ違ひなりりしよな東海道北陸道舟路山路五畿七道ハ關を

① する探さるハ義經天地ハ網を張られたり這れも果ぬ運命よて生中に身ハ苦しめ恥を

さらすも口惜しハ

唄 「佛神も捨て玉ふ義經を

⑤ 主従の義を立る方ハの心ざし何なる世より忘るべき此のまハ義經の首打て鎌倉迄の

④ 見参ハ入れて恩賞ハあづのり只追善ハハ梶原父子ハ首討つて義經の墓の前ハ手向け

てたべ

唄 「是迄なりと浮佩刀よ手を掛は自害と見えければ辨慶汚手よ縄付きて

ト判官佩刀よ手を掛るを辨慶押し止め

辨慶 君よハ物に狂とせ玉ふの先づ汚待いハ

判官 所詮這れぬ義経武運の盡と覺悟いたした其所放せ

唄 「争ひ玉へハ十人の人々騒ぎ立ち

ト是にて十人の作り山伏屹度なり

兼房 偽山伏めて世を憚るも君を世よ出し參らせんため

伊勢 汚自害あるのらハ關守ハ愚ク右大將頼朝公をも人とも蟲とも思とバこと

駿河 關押破り鎌倉ハ亂れ入り梶原父子をさげ切にし谷七郷を切散し

片岡 鶴ヶ岡の神前よ立並んで願掻破り

馬井 源氏の氏子守りめなき正入帷の面打せん

常 「いざ打立たんととらりと立つ辨慶眼ハ角を立て

辨慶

ヤア方々物よ狂ふ若きものども騒ぐともよい年の兼房血の枯て智慧もかれたる
の力んでよくハ去年の春ナセ腰越より歸りしぞ只何事も此辨慶よ汚任せあれ○

ト是よて人々の下よ住ふ

我君も我君本意も遂す汚腹召し心を盡し身を碎く郎黨どもハ忠節を水の泡とあし一
騎當千の武士ども大死せよどの汚心のよし思召つめ玉とハ武藏をはじめ十一人汚手
に掛られ首をはね其後ハともりくも○

唄 「世よ落て淺まじや汚心までくらみしりと涙を浮め制すれば君を始め奉り
皆袖をぞぞ不らるゝ

漢の高祖ハ紀信の命を棄て、こそ楚の圍みをぞ追れ玉ふ何れも是よ待玉へ辨慶一人
關所に向ひ南都東大寺の勸進と偽り某當其那の辨舌よて關守富樫ハ心を宥め仕畢せ
ていこい悦びの貝を三度吹立てやすべし夫を合圖よけ附安く關を越玉へもし什損
じて討るゝの搦め捕らるゝ其時ハ名残の貝を只一聲吹べきぞ辨慶ハ最期と思ひ同向
して是より都へ取て返し深山の奥ふ汚身を隠し運の時を待たせハ先を折るでハ

なげれども○

唄 「千一つも心をよするの堅き車搦へて人より名残の貝を吹とても
 辨慶が不便な主従朋輩の義が立ぬなんぞとて露所へ駈付け君の傍身は過らわらば
 唄 「生る世の恨みぞやと鬼を欺く辨慶も悲嘆の涙は暮れ居たる義經其手を
 取せられ

ト義經辨慶よろしくあつて

判官 斯まで我を思ひくれる志し悉し有難し去らぬら汝と主従の契約せしより鶴
 越八島の戦常影の形に随ふ如く離れし事もあうりし今汝一人先達て義經永らへ
 たりとも何のせん生死共よと誓ひしから我も關所へ掛るべきぞ

辨慶 ハ、ア有難き其仰せ辨慶只今關所の土と相成しとも悔あらし命を棄るも君がため
 只辨慶ふる任せしへ喃入とも必ず早まり玉ふなよやがて辨慶が吹く法螺の貝よよく
 心をつけ吉左右を待玉へ

唄 「勇んで出る辨慶も心の中二つがけもしや關所を仕損じて此世の君を見

納めると見ぬ顔ながら振返る判官も見送て或ひは勇み或ひは肝を冷せる
 主従の地獄の上の一足飛びのるうぶざるの喉の針薄氷を踏む心底、思ひ遣
 られて痛はじ

ト此内辨慶義經主従の別れを惜む仕打充分よあつて辨慶下手へ這入る

唄 「判官 観念の傍目を塞ぎ

判官 日本國中あらゆる神別して石清水正八幡鞍馬大悲多門天關守の心よ入替り武藏
 が心身安穩よ十二人の主従左右なふ關を通してたべ

唄 「普門品陀羅尼品打上げ、わとむせが思ひく、の守り本尊氏神産神呼出
 し、般若心經金剛經あるひの真言中臣稜ひくりけよみろけ祈念ある瀧の
 ひいさや松吹く風野飼の牛の聲までも辨慶が吹く法螺貝うと耳をそなたて心
 を澄し只一時を待はども千年を経る心地して今うくと待所ふ山もひよのす
 法螺の貝風にたぐへて聞えけり
 ト此時向ふて法螺の貝の聲一聲聞える

唄 「すはやと人ど色めき渡り一聲吹く名残の貝三度吹の悦びの貝跡を聞け
と耳を澄し其方の空を眺むれと唯一ト聲のあともなくアツと云ふも甲斐を
あき

判官 スリ辨慶搦め捕られたるを最早浮世の是迄なり

唄 「かけ出さんとしたまへハ兼房彦孫掛ますごつて

ト兼房義経を止める

兼房 這の口惜きは有様辨慶の詞とや汚忘れゆく身命全ふしては本意達させ玉ふこそ

大將軍どのすなれ活過たる兼房彦名代は關所よかけ附け辨慶一緒討死せん君よ

ハ先静まりたまへ

判官 イヤと兼房大將の身を立て世は出んと勵む事全く我身の爲ならず附隨ふ者共を

一國一郡の主もしたき願ひなり八島よて嗣信吉野山よて忠信の我命は替りしは

なんぞう今も残念なり辨慶は限らず十一人の郎黨一人よても失ひ義経永らへ何りせ

ん此所を放せ

唄 「の玉ふ詞は兼房も力なく

兼房 左の玉ふ上の我等も一足も退りし關の戸を枕と屍を並べん

伊勢 オ、云ふや及ぶ方と續け

唄 「チ、尤もと大將引添て關路にのゝる勢ひの子路ダ石門楚の鴻門閻魔の

應の鐵門も踏破るべくすさまじい

ト皆く勢込んで下手へ這入る波の音よて道具廻る

本舞臺四間中足の二重幕を張り正面板羽目上下逆茂木亂枕上手下手は木戸口下手は

櫛門臺其上は首を梟しあり上手は長卷熊手等を飾り都て安宅新關の体爰は平舞臺に

辨慶太き繩よて十重廿重は縛られて居る番卒數人附添ひ居る二重は富樫の左衛門家

直鳥帽子周袍にて住ひ居る此見得よろしく道具廻る

唄 「聞きしよまざる安宅の關二重の矢切二重のさし貫の木鯨錠しつと下し

たる有様ハ左も嚴重小見えふけり

ト此内上手より判官と十人の作り山伏駈て出で來り

判官

さてこそ先達は繩掛しよな飛掛つて切はさき先達を助けんするぞ何れも進め

唄 「勇立たる其氣色南無三寶と辨慶人目のひまよ判官をねめつけく心の中心の中

ハ早瀬川もまる、波の川柳そらねふりして居たりける判官番所は突と寄り

ト此文句の通り辨慶判官を睨付け空寐りをして居る義經木戸の内よ入り

判官 東大寺勸進の山伏奉加つりすべつらぬ迄此先達ふ何とがわつて縛られしを疎忽

の繩掛け本地本山より鎌倉へ訴へられ非ぶ事したる富樫後日の罪科笑止くイ

テ先達の繩解ん

唄 「立寄りたまへ番のもの一度よそらりと取廻す左衛門聲をうけ

ト義經寄て辨慶の繩をどくんとす番卒一同義經其他の山伏を取巻く此内富樫側

よありたる巻物を取出し

富樫

ヤアくしれたる山伏のら此一卷のわの法師が勸進帳と名づけ天もひいけと讀上

しを奪取つて披見すれば是見よ勸進の赴の一字一点もなき往來の巻物誠らしき聲し

てそれつらつらおもんみればなんぞ、佛を偽り人を欺く曲者實又夫も理りくれこそ

判官

西塔の武藏坊辨慶鎌倉のぼん下知よよつて搦め捕たる左衛門非ぶ事との事おのし

ム、あの先達を辨慶どの色黒く脊高く似たるを以ての証據ならん天下の關所は迂

論の判断正しき証據承とらん

富樫

チ、天下の沙汰は非の入り定むるべきは辨慶の繪圖是見よ

ト富樫辨慶の繪圖を取て見せる

唄 「一軸とつと掛けられつしもうつす辨慶の左の毗の黒子まで有くと描せ

しハ追れがたなき浮運の末うたてりける次第なり判官今の詮方なく

判官 辨慶の繪圖のあるうらの定めて判官の繪圖もいべしもの罪科ハ判官一人繪圖に

合せて搦め捕の先達を助けられよ

富樫 イヤ繪圖までもかく左云ふ浮邊の判官をよ

唄 「星をさくれて浮供の入りすの事こそ各太刀よ手を掛る辨慶つんと寄て

判官をさそと踏倒し腰のつがひをさうくと踏つけくはつたと睨らん

ト是もて人々屹度なる辨慶義經を踏倒しさうくと踏つける事あつて

辨慶 強力上りのうす山伏年うさ連を差置き最前よりの差出面憎くし〜と思ひしに義
 經の繪圖合せ似たるものを搦めよじの己れが似たらば何とせん此法師も辨慶程の
 あらずとも出と云とい五人三人掛つても搦めらるゝ者ならぬと己れの元來孤子の父
 もなく母もなく一人の兄弟子小見放されさまよふ体骨髄までつし不便さよ引未安穩
 ならせんと關守を宥めの爲め鬼神と云れしハ小さへ指もさゝれぬ此法師が雜人原よ
 組敷れむ〜と繩を掛りたり某の掛らねば己れも掛る此繩○

唄 「たどへ千筋万筋も手足の繩いじけをどく名も掛つた一筋の子と孫とまで
 解ぬぞや

諸國を勸進し大伽藍建立の大願を忘れたるう罷立て強力○

唄 「のふ同行の客僧達さやつ引立て歸てたべ

此市篠掛の山伏たる身の主君なり主君を踏んだる天罰未來の無間へ何せん全く己
 れのいたいのぬ此頭巾篠掛の主君を感く許させ玉〜

唄 「汚めんあれと餘所よとよせ泣ければ汚供の人とも共み涙の人目の關つゝ

み兼たる有様の目も當られぬ次第なり

ト辨慶義經の膝小額をつけいたいて泣く始終富樫の實と見て居る

唄 「岩木をひすむぬ富樫の左衛門汚痛としさ肝よしみ源家無双の名將武士の
 司の汚身よて富樫は腰を屈め玉ふ汚連の程の痛としやと番所を飛下り辨慶が
 縛めをどいて棄て

ト此内富樫二重を下て辨慶の繩をどいてやる事あつて

富樫

エ、嗚呼がまじき山伏ども己れら判官辨慶と名のらぬ計り小作りなし此富樫をた

そのれども鎌倉迄のお目鏡よて汚關所を守る 某實否をしらいであるべきう誠の判
 官辨慶よ非ず己れ等ハ此頃許多切て捨たる山伏の法眷一類其恨を報せんため判官辨
 慶は人相似たるをゑり出し左の毗入黒子してソリヤ辨慶よと搦めさせ鎌倉へ引の
 れ此左衛門を疎忽もの不覺者と切腹仰付らるゝを見て腹のんどの企みうぬらひ面ふ
 顯れたり不敵もの嗚呼の者五十日も百日も關所よつなき愛目見せんと思へども誠の
 判官辨慶を詮索の邪魔となるものれら留て何くせんサア通れ貫の木開け者ども

番卒

ハア

唄 「承はつて括と開らし關の戸や人々胸の闇の夜は月の出たる如くなり辨慶少しも騒がず

ト此内番卒下手の木戸を開く

辨慶 是左衛門を固より誠の判官辨慶ならねば助けられでも悦をす山伏道の作法にて分はわれ俗人は對し問答も無用通して後悔めさるゝな

唄 「心の先は急げども足本の怒とど方一町の番所の前千里を歩む心地にて行過たまへば下部の雜式

ト是よて判官十一人の山伏下手へゆくんとする

番卒

ヤア此笈ふの鑑あり

唄 「留れどこそいひしめきたれ

ト番卒尤める富樫思入あつて

富樫

扱工んだり〜判官なよ似せんとて鑑まで入たるな此行先よ井上左藏門上田の

兵衛が固めたるニケ所の關あり是よても又判官顔して關守をなぶるゝ必定憎も憎し次手判くれんす〇

ト富樫一札よ印判すへて出し

サア是を持ってゆるび己れ等びいつうたにて判官辨慶とたむりつてもいつうな尤むる者なし疾く是を持って通れ

唄 「通れどこそい命じたれ

ト富樫次手判を義經の負ふたる笈の中よ投入元の處へ歸る辨慶關の外よ立て日暮までひまを一つ一錢の奉加もつらぬエ、しそい關守の日高くは能登の國ま

でも往らと思つた疾く退散

唄 「イヤ疾くを促せば判官主従喜の眉をひらくや關の戸は虎の尾をふみ毒蛇の口のがれてこそい立てゆく

ト是よて判官伊勢駿河片岡熊井廣綱兼房備前の平四郎常陸坊鷲尾皆く向ふへ這入る辨慶跡も残る富樫の辨慶を縛りたる繩を取上て押戴さ

富樫 忠孝武勇の賢臣に非業の細を掛たりし富樫を罪を弓矢神許したまへ
辨慶 富樫の左衛門武運長久引矢の冥加まじませ

ト兩人の見得よろしくあつて幕

引附け 辨慶宜敷振て這入るあどシヤギリ

明治二十六年六月十三日印刷
同 年同月廿六日發行

一定價金七錢

著作兼發行者

守 住 桂

下谷區二長町五十二番地

興行權所有者

山 越 忠 吉

神田區三崎町三丁目一番地

印刷人

中 里 岩 次 郎

京橋區尾張町新地十二番地

興行權所有



發賣元

やまもと 堂

京橋區尾張町新地十二番地

